

ひとり幄の裏に居りて、遙かに霍公鳥の喧くを
聞きて作る歌一首 并せて短歌

四〇八九番

高御座 天の日継と 皇祖の 神の命の 聞こし
食す 国のまほらに 山をしも さはに多みと
百鳥の 来居て鳴く声 春されば 聞きのかなし
も いづれをか 別きてしのはむ 卯の花の 咲
く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あや
めぐさ 玉貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど
聞くごとに 心つぎきて うち嘆き あはれの
鳥と 言はぬ時なし

反歌

四〇九〇番

行くへなく あり渡るとも ほととぎす 鳴きし
渡らば かくやしのはむ